

# 平成27年度 陸前高田市文化財報告会

気づき



つたえ



活かす



開催日時：平成28年2月6日（土）13:00～  
（展示は12:00～）

開催場所：陸前高田市コミュニティホール  
（大会議室・小会議室）

※事前申込不要・入場無料

お問合せ：陸前高田市教育委員会 生涯学習課 0192-54-2111（内線262）



## 平成27年度陸前高田市文化財報告会 プログラム

- ・ 12 : 00 ~ 開場・受付開始
  
- ・ 13 : 00 ~ 13 : 05 開会のことば 堺 伸也 (陸前高田市教育委員会教育次長兼生涯学習課長)  
挨拶 山田 市雄 (陸前高田市教育委員会教育長)
  
- ・ 13 : 05 ~ 13 : 35 埋蔵文化財調査成果報告①  
花館跡・高田城跡・西和野 I 遺跡 (高田町) . . . . . 1  
村木 敬 氏 (公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター)
  
- ・ 13 : 35 ~ 14 : 05 埋蔵文化財調査成果報告②  
本宿館 (横田城) 跡 (横田町) . . . . . 7  
後藤 円 (陸前高田市教育委員会)
  
- ・ 14 : 05 ~ 14 : 20 (休 憩)
  
- ・ 14 : 20 ~ 15 : 05 教育委員会の文化財への取り組み① ~吉田家住宅復元事業~
  - ・ 岩手県指定文化財 仙台藩大肝入屋敷吉田家住宅の再建をめざして  
— 吉田住宅復元事業について — . . . . . 1 1  
浅川 崇典 (陸前高田市教育委員会)
  - ・ 岩手県指定有形文化財「吉田家住宅」跡 (気仙町) の調査 . . . . . 1 6  
瀧本 正志 (陸前高田市教育委員会・福岡市より派遣)
  
- ・ 15 : 05 ~ 15 : 50 教育委員会の文化財への取り組み② —中沢浜貝塚歴史防災公園整備事業—
  - ・ 中沢浜貝塚歴史防災公園整備事業について (広田町) . . . . . 2 5  
藤元 剛史 (陸前高田市教育委員会・京都市より派遣)
  - ・ 中沢浜貝塚歴史防災公園関連試掘確認調査概要 . . . . . 3 1  
遠藤 勝博 (陸前高田市教育委員会)
  
- ・ 15 : 50 ~ 16 : 00 質疑・応答
  
- ・ 16 : 00 ~ 16 : 05 閉会のことば 堺 伸也 (陸前高田市教育委員会教育次長兼生涯学習課長)





## <埋蔵文化財調査成果報告①>

### 西和野 I 遺跡・花館跡・高田城跡（高田町）

公益財団法人岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

村木 敬 野中 裕貴

当センターでは、平成 24 年 9 月から平成 27 年 9 月までの約 4 年間で、4 遺跡、調査面積約 7.5 万㎡を発掘調査しています。ここでは、西和野 I 遺跡、花館跡、高田城跡の成果を紹介します。



遺跡位置図

#### 1 にしわの西和野 I 遺跡

所在地	高田町字鳴石 50 ほか	調査原因	土地区画整理事業高台 4
調査期間	平成 27 年 4 月 7 日～5 月 8 日	調査面積	12,275 ㎡

#### 見つかった遺構・遺物

古代：遺構は方形周溝 1 基・土坑 8 基、遺物は土師器の坏・甕が見つかっています。

弥生：遺構はなく、遺物は弥生土器片、続縄文土器、石鏃が見つかっています。

#### まとめ

遺構は段丘の尾根部の最も高い場所に方形周溝、それより低い位置に土坑が作られています。方形周溝（写真①）は削平されているため棺を納めたとされる中心部はなく、それを取り囲む溝だけが見つかっています。溝は長さ 12×12m、幅 1.6～2.4m の規模をもつものです。この遺構はお墓と考えられるものですが、その全容は分かっていません。時期については、溝の底から古代の土師器が出土していることから、奈良時代から平安時代にかけてのものと思われます。



坑（写真②・③）からは、大量の炭が見つっています。炭の下の土が焼けていることから、炭窯と考えられそうです。その炭の年代を測定した結果、奈良時代と平安時代に分けられます。また、堆積する土の中からは十和田 a 火山灰（写真③白い土の層）も確認できており、915年に降下したとされるものです。基本的に炭の年代はこれよりも古い年代が得られており、うまく整合している例も確認できません。



これらの遺構が見つかったことから、周辺には奈良から平安時代にかけて人々が生活を営む集落が存在したものと考えることができそうです。

奈良～平安時代以外には、続縄文土器（写真④）と弥生時代後期の土器が合わせて見つっています。これは昨年度に市教育委員会で調査した愛宕下Ⅱ遺跡と同じ状況となり2例目です。この地域が、北海道地域と関わりのある環境にあったことを裏付けることができそうです。





## 2 はなだて 花館跡

所在地	高田町字太田 34 ほか	調査原因	土地造成事業
調査期間	平成 24 年 9 月 18 日～11 月 29 日 平成 25 年 4 月 9 日～7 月 11 日	調査面積	9,700 m <sup>2</sup>

### 見つかった遺構・遺物

近世：遺構はなく、近世陶磁器 35 点が見つっています。

中世：遺構は曲輪 4 カ所・土塁 5 ヶ所・堀 2 条・切岸 6 ヶ所・虎口 1 カ所・柵列 2 条・掘立柱建物 2 棟・鍛冶炉 5 基・土坑 7 基・性格不明遺構 1 基・焼土遺構 4 基・溝 6 条・柱穴 81 個・貝層 1 箇所、遺物は国産陶器 96 点・中国産磁器 19 点・砥石 3 点・茶臼 3 点・埴塙 2 点・鉄滓 2 点・貝類小コンテナ 25 箱が見つっています。

弥生：遺構は住居状遺構 2 基、遺物は弥生土器小 1 箱が見つっています。

### まとめ

館跡は、時期を 15 世紀後葉～16 世紀初頭（Ⅰ期）・16 世紀中葉（Ⅱ期）に分けられ、それぞれの時期で遺構配置など内部の様子が大きく異なることが分かっています。

Ⅰ期：自然地形を大きく残し、頭頂部のみ遺構が構築されている時期です。柵列（写真⑥）と溝（写真⑧）で囲まれた中に、1～4 号鍛冶炉（写真⑤）などを形成しています。また、これらの鍛冶炉を操業した工人が廃棄した食料の滓（写真⑦）が見つっています。柵列などから城館と考えていますが、その機能は分かっていません。



Ⅱ期：大規模な造成が行われた時期（写真⑨）です。主郭は縁辺に版築を施した上に土塁（写真⑩）を構築し、切岸、堀（写真⑩）でコ字状に囲み、その中心に掘立柱建物などを形成しています。遺構や遺物など生活をした痕跡が少ないことから（写真⑫）、非常時に用いられた城と思われます。



⑨



⑩



⑪

このように、調査によって内容の異なる2時期に分かれることがわかりましたが、いつ、誰によって構築されたかについては分かっておりません。

文献によれば、本城主には浜田胤長や小泉能登守だという説がありますが、上記の様に幅広い年代観の中で捉えているため、それらの特定までには至っていません。



⑫



### 3 たかだじょう 高田城跡

所在地	高田町字洞の沢、鳴石、本丸地内	調査原因	土地区画整理事業高田西地区
調査期間	平成26年4月7日～11月27日 平成27年5月11日～9月30日	調査面積	49,000 m <sup>2</sup>

#### 見つかった遺構・遺物

近世：遺構は土坑5基、遺物は多数の陶磁器が見つっています。

中世：遺構は曲輪14箇所、土塁2基、堀1条、切岸16箇所、掘立柱建物1棟、遺物は中国産磁器が数点見つっています。

縄文・弥生・古代：遺構はなく、土器が数点見つっています。

#### まとめ

城館は氷上山から南へと延びる段丘上に作られており、眼下には平野と広田湾を望むことができます。事前に作られた全体図によれば、城館は曲輪Ⅰ～Ⅴまである南北約250mの大規模な施設であることが想定されていました。

今回は曲輪Ⅰ・Ⅱを除く、Ⅲ～Ⅴが調査の対象でした。城館の遺構である施設は曲輪Ⅳでは確認できましたが、それ以外の曲輪Ⅲの一部と曲輪Ⅴでは確認できませんでした。このことから従来想定していた規模よりは小さくなりますが、それでも南北約200mある立派な城館のようです。

曲輪Ⅳ(写真⑬)で見つかった施設の作り方からは、その城館が大規模な土木工事を伴っていることが分かりました。また、この工事によって古い時代の遺跡を壊した上で作られていることも想定できそうです。

ここでは曲輪Ⅳで見つかった施設をいくつか紹介していきます。



⑬

堀（写真⑭・⑮）は遺跡の北東側、曲輪Ⅳ・Ⅴとの境に位置し、城へ登る通路の役割を果たしていたと思われます。規模は長さ100m以上、幅3～5m、深さ3mのもので、断面はV字の形をしています。底は人一人が歩ける幅で、現在の地形よりも急傾斜に作られています。頂上付近の館の入り口付近では階段状になり、簡単に登ることができないような仕掛けになっています。また、この堀は城館と外部との境界としての役割を担っていたものと思われます。



切岸（写真⑯）とは敵の侵入を防ぐために作られた壁のことです。最初に丘陵の頭頂部を大きく削り出した後に、掘り返した土を幾度も積み重ねながら急斜面を作りあげていることが分かりました。その盛り土の厚さは一番厚い所で約4mあり、約5mの高さの斜面を確認することができました。

そして、頭頂部（写真⑰）となる一番上は平らに整形して、長さ40×15mの長方形をした平場を作っています。この場所では掘立柱建物が1棟見つかっています。



土塁（写真⑱）は敵の侵入を防ぐために作られた壁で、高さ2mほど地山を削り出しています。このような施設は写真のほかに2カ所見つかっています。城館の時期である中世の遺物はあまりにも少なく、15世紀後半の中国産磁器が数点確認できただけです。

城館の様子については分からないことばかりですが、今後の整理を通じて少しでも明らかに出来ればと考えております。



## <埋蔵文化財調査成果報告②>

もとじゆくだて

本宿館（横田城）跡（横田町）

陸前高田市教育委員会生涯学習課

後藤 円

所在地	陸前高田市横田町字本宿 53-2	事業名	熊野神社社殿移築事業
調査期間	平成22（2010）年4月16日～12月15日 平成23（2011）年5月16日～7月19日		
調査面積	849m <sup>2</sup>		

### 1 本宿館跡の調査について

本宿館（横田城）跡は、北上山地から広田湾に南流する気仙川左岸の氷上山の西麓に広がる丘陵先端に位置しており、気仙川の河口から約6km上流です。現況は、主に植林による林地です。本宿館跡は、東から西に下る尾根上の隆起を整形して東西二つの曲輪（郭）が形成されています。東側の曲輪（郭）が主郭で、その大きさは東西約70m、南北約100mで、標高は概ね74mです。西側の曲輪（郭）が副郭で、その大きさは東西約80m、南北約20mで、標高は概ね60mです。この西側に移築前の熊野神社がありました。

今回の調査で見つかった遺構は、空堀2、土塁1、区画（平坦面）1、掘立柱列5、土坑4と多くの小土坑で、出土した遺物は永楽通宝1です。

これらの見つかった遺構について、その重複関係、位置関係から次の2時期の変遷のあったことが考えられます。

**I期**：2つの平坦面から成る区画と3列の掘立柱列があった時期。この掘立柱列は塀の跡と考えられます。尾根の北側を稜線沿いにひな壇状に造成した区画の内部をさらに塀で区画して使われていたと考えられます。

**II期**：空堀、土塁と2列の掘立柱列があった時期。I期の後の時期。空堀は土層断面より大きく3回掘られていることが認められ、幅4.3m、深さ1.1m、検出した長さは約17mです。また、この時掘り出された土を利用して土塁が作られたと考えられます。土塁は空堀の副郭側の肩に沿って築かれ幅約9mです。北側と南側が畑地や山林の造成の際に削平され、約20m分が残っていました。

### 2 まとめ

- (1) 地表面観察だけでなく、遺構によっても城郭である確証が得られました。
- (2) 城郭（堀、土塁）に先行する土地利用があり、尾根の北寄りを稜線沿いにひな壇状に造成した区画内部を塀で区画して使われています。
- (3) 堀と土塁は、少なくとも2回造り直され、堀内の小規模な掘り直しも行われています。
- (4) 副郭内は塀などで区画して使われています。
- (5) 主郭と副郭の間だけでなく、南側にも堀を伴います。
- (6) 地表面観察で確認できた縄張りは複数時期の変遷を経たもので、現状では確認できない先行の土地利用や防御施設・構造物があったと考えられます。





本宿館遺跡(南から)



2010年調査区



2011年調査区(土塁と西側小土坑群、西から)



2011年調査区(土塁除去後、北西から)



2011年調査区(南東から)



土塁



土塁土層断面



空堀土層断面



出土遺物(永樂通宝)



土坑

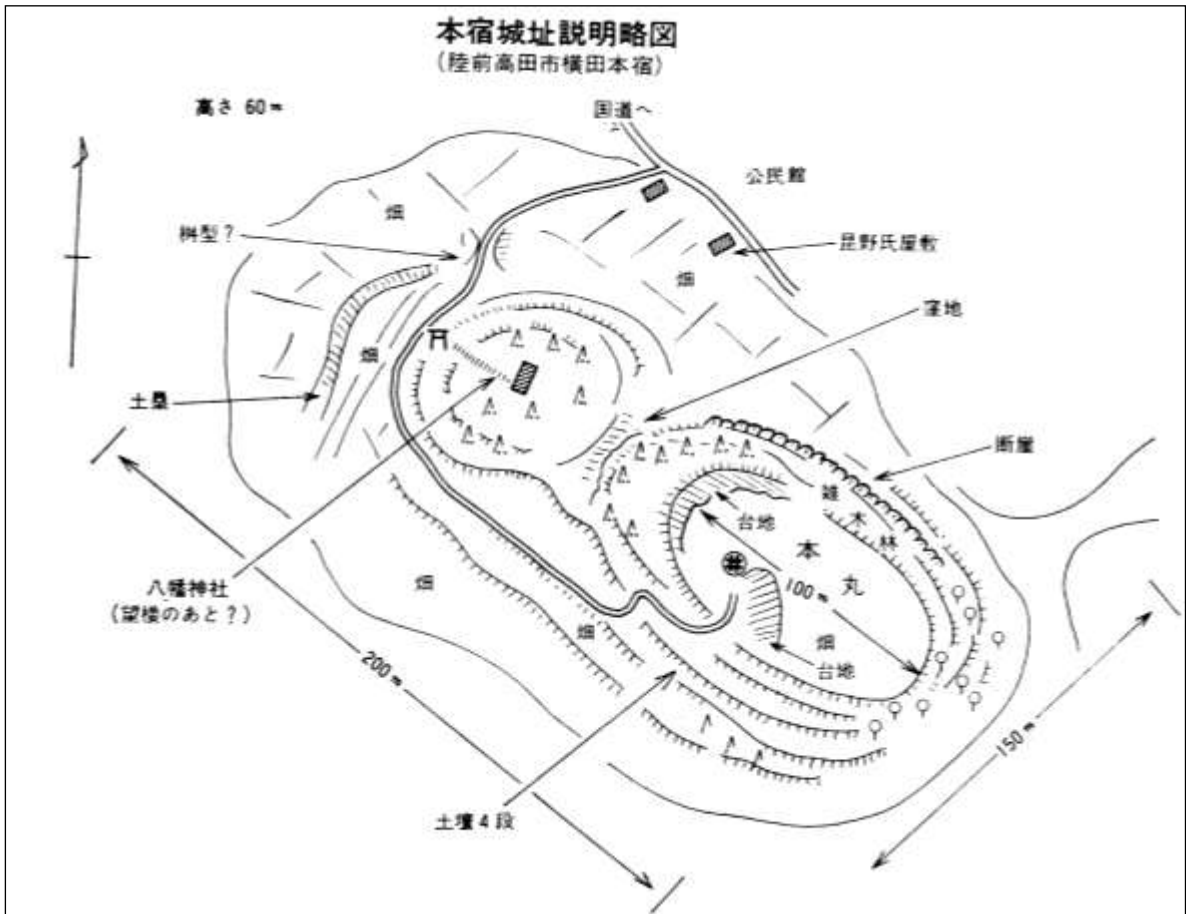


熊野神社 (移築後)





本宿館跡調査区位置図



本宿館縄張図『史料 仙台領内古城・館 第一巻』より



## ＜教育委員会の文化財への取り組み①＞

岩手県指定有形文化財 吉田家住宅復元事業について（気仙町）

－仙台藩大肝入屋敷 吉田家住宅の再生をめざして－

陸前高田市教育委員会生涯学習課

浅川 崇典

### 1 吉田家住宅とは

吉田家住宅は、仙台藩気仙郡の大肝入の住宅遺構で、享和2（1802）年に建築されました。仙台藩の大肝入は、村方役人の中でも最上位に位置する役職であったことから、地方の有力者が藩から任命されており、吉田家も、元和6（1620）年に気仙郡の24ヶ村を治める大肝入として任命された由緒ある家系です。旧仙台領内における他の大肝入住宅建物が取り壊されている中で、当該建物は建築年代や大工棟梁名、藩政期における使用法の一部が明らかにされ、主屋以外の付属屋（土蔵、納屋、味噌蔵）も残されています（図1）。このように、学術的にきわめて貴重な住宅建物であることから、平成18（2006）年に岩手県有形文化財として指定されました。

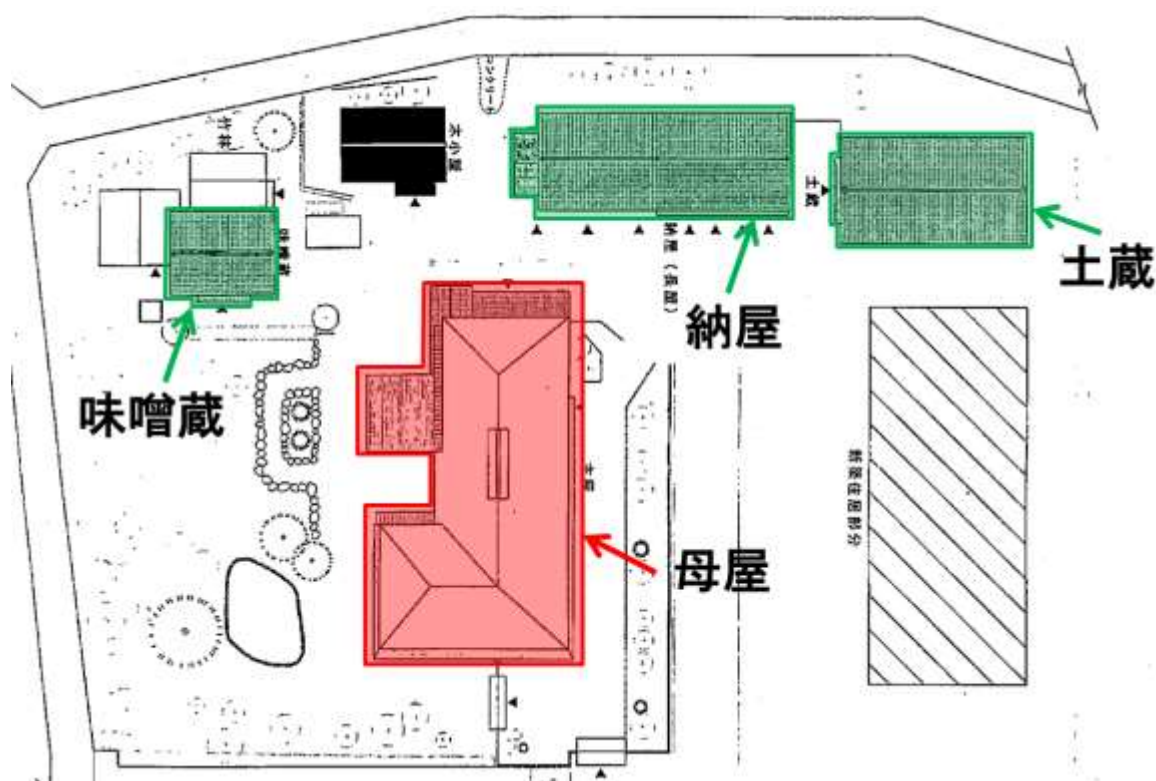


図1：吉田家住宅の指定された建物

当住宅は建築後400年の間、11回に及ぶ津波や、洪水、大火を経験し、その都度それらを乗り越えてきましたが（写真1）、平成23（2011）年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震に伴う大津波によって主屋と各種付属屋が全て流失する等、壊滅的被害を受けました（写真2）。座敷廻り部分は屋敷の裏側に、茅葺屋根は諏訪神社を回った気仙小学校側に約300m流されてしまいました。しかし、岩手県立博物館、八戸工業大学・月舘敏栄教授とその学生、所有者らによる懸命な部材の救出活動が行われ、同年6月中旬には主要構造部材の7割程度に相当する1016本の部材を救出されました。

本市の復興計画の中にも、生涯学習拠点として吉田家住宅復元が掲げられています。そこで本事業は県文化財指定の継続を念頭におき、後世へこれまで築き上げられてきた「歴史と文化」の継承を目指し、大肝入屋敷吉田家住宅の復元を行うことを目的とします。



写真1：震災前の吉田家住宅母屋（高橋恒夫氏撮影）



写真2：震災後の吉田家住宅  
（岩手県立博物館撮影）



## 2 事業内容

### (1) 建築部材の破損状況・使用箇所特定調査

吉田家住宅の主要構造部材が回収された（写真 3）が、その中には、主屋、文庫蔵、馬車小屋、味噌蔵の部材が混在しており、その他の建物の部材も含まれている可能性があります。再建のためには、部材の特徴から使用箇所・建物を特定や破損状況の把握、再使用が可能か判定を実施する等の詳細な調査が必要です。そのため、今年度は、八戸工業大学の建築専門家と気仙大工の協力のもと、部材調査を実施しました（写真 4～8）。



写真 3：回収された部材の山



写真 4：破損状況確認調査



写真 5：使用箇所特定調査



写真 6：墨書跡確認調査



写真 7：確認された墨書跡



写真 8：部材管理番号のナンバリング



## (2) 救出された建築部材の脱塩実験

救出された部材は海水損していたため、部材の多くはその内部にまで汚泥、雑菌、塩類が入り込んだと思われます（写真 9、10）。このような状態のまま乾燥し部材を使用した場合、再び吸湿してカビが発生し、腐敗が進む可能性があります。そこで、部材に固着した汚泥の状況、雑菌の繁殖状況、塩類の残留状況を調査し、海水損の実態を明らかにした後、被災の程度に応じた措置を講じることとし、肉眼では判定が困難な塩類の含有状況、とりわけ塩化物イオンの残留状況（塩分濃度）を調査しました（写真 11～13）。また、浸水した部材が完全乾燥までに要する時間も測定しました（写真 14）。



写真 9：激しく破損した部材



写真 10：比較的破損が少なかった部材



写真 11：高圧洗浄で表面の汚れを除去

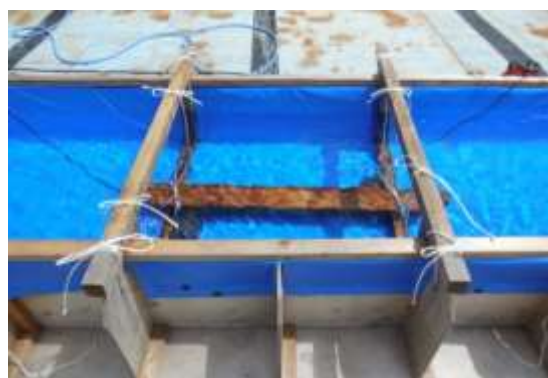


写真 12：浸水（脱塩）中の部材



写真 13：塩分濃度測定機



写真 14：乾燥中の部材

### (3) 下部構造調査

今後、当住宅を復元するうえで、それらの建築工法や修理・改築履歴という情報が必要になってきます。そこで、住宅跡の調査を行い、礎石の配置や形状や建築工法、修理、改築履歴を確認します。

## 3 今後の予定

平成 27 (2015) 年度の調査結果等を踏まえ、平成 28 (2016) 年度からは、復元計画の策定を行います。そこで、有識者による「仙台藩気仙郡大肝入 吉田家住宅復元委員会 (仮称)」を設置し、建築専門家の指導の下、県指定文化財の継続や建設後の活用も考えた復元計画を策定し、当住宅を復元していきます。





# 岩手県指定有形文化財「吉田家住宅」跡（気仙町）の調査

陸前高田市教育委員会生涯学習課  
瀧本 正志（福岡市より派遣）

## 【キーワード】

絵図、礎石、墨書、有田焼、製鉄・鍛冶

調査地 気仙町町裏 12  
調査面積 約 1,000 m<sup>2</sup>  
調査期間 第 1 次調査 平成 26 年 11 月～平成 27 年 3 月 16 日（事前調査を含む）  
担当者：阿部敬生（神戸市より派遣）  
第 2 次調査 平成 27 年 5 月 25 日～平成 27 年 11 月 30 日  
担当者：瀧本正志

## 1 調査に至る経緯

仙台藩気仙郡大肝入を務めた「吉田家」の住宅跡発掘調査は、1802 年に建築（主屋のみ）、2006 年に岩手県有形文化財（建築物）に指定、2011 年の東日本大震災で流失した「吉田家住宅」の建物基礎を明らかにして記録することを目的としたものです。そもそも、建物は基礎とその上に建てられた小屋組とで構成されています。しかし、「吉田家住宅」に関しては、文化財指定前に建物の小屋組や間取り調査は詳細に記録されましたが、建物基礎の調査は未着手で記録が存在しません。このため、気仙地域を代表する歴史的建造物の記録保存を図り、将来の建物復元を行う際の基盤資料を整えておくことは行政の責務と考えた次第です。

併せて、明治初年に改築された主屋（旧主屋）と江戸時代後期の三種類の建物史料絵図（間取図）に記された建物との関連や建物の変遷、さらには屋敷の土地利用の移り変わりを明らかにできればと考えました。



図 1 調査地位置図



図 2 吉田家住宅全景（流失前）



図 3 「吉田家住宅」主屋（北東から）



## 2 調査の経過

調査は、指定建物四棟「主屋・土蔵・味噌蔵・納屋（長屋）」の基礎の被害状況や残り具合を把握することから開始し、図面や写真で記録しました。その後、各建物の地盤を掘り下げたところ、下層から礎石や礎石を据え付けた穴が見つかり、建物を建て替えていることが判明しました。さらに、最下層からは製鉄に関する炉跡なども発見されました。



図4 吉田家住宅主屋跡調査風景（北西から）

## 3 発見された遺構

- (1) 指定建物四棟の基礎
- (2) 指定建物・納屋（長屋）より古い建物基礎や竈跡かまど
- (3) 指定建物・主屋の変遷を示す建物基礎や釜跡  
※ 礎石の上面には、柱の位置や方向、吉祥字を墨で書いた痕跡が残っています。
- (4) 製鉄・鍛冶関係



図5 鍛冶関係遺構（東から）

## 4 出土遺物

陶器、磁器、貨銭、金属製品、製鉄関連製品、石製品、自然遺物等がコンテナで 25 箱出土しました。遺物の大半は江戸時代に有田などで作られたものです。

### (1) 陶磁器

ア 最も古い遺物は 1620 年～1640 年に肥前や中国の景德鎮窯で作られた染付の皿。

イ 有田・肥前磁器の上物は、1820 年代頃まで連続と購入・使用されています。

ウ 1820 年代以降は、有田の上物磁器は認められず、雑器の数が増加。

エ 幕末になると瀬戸・美濃系の碗や皿が出現。

### (2) 銭貨

元文一分金（判）、寛永通宝（一文銭、四文銭）、中国銭（治平元宝・元祐通宝・洪武通宝・永樂通宝）

### (3) 金属製品 銀製簪、煙管、釘、鋸

### (4) 製鉄関連製品 ふいごはぐち てっさい はさみ なた 鞆羽口、鉄滓、和鋏、鉈

### (5) 石製品 石臼

### (6) 自然遺物 貝殻（ほっき貝・鮑・ホタテ） 整地層に密集して出土していました。



図6 中国・景德鎮の染付皿（1620～1640年）



図7 出土した銭貨

## 5 まとめ

- (1) 主屋は、解体・改築を経たものの、礎石の状況から 1802 年建築時の形態を残していたことや絵図史料の正確さが明らかとなりました。
- (2) 明治初期の主屋改築は、建物全てを解体して建物基礎を整えた後、以前の部材を用いて建て直したものと推定されます。建物の改築は、明治初年以降においても 2 回以上の大規模な改築が下屋を中心として行われているようです。
- (3) 1802 年に主屋が建築される以前は、同じ場所に平面形が L 字形もしくは長方形の建物が寛永年間（1624 年～44 年）頃には建てられ、近世での生活が始まった可能性が考えられます。この時期は、初代吉田宇右衛門が大肝入になった時期（1620 年）と重なるのは注目されます。
- (4) 1820 年代以降の有田の上物磁器が認められないのは、建物が火事等に遭っていないために良い物は伝世したためと考えられます。このことは、旧主屋は 1802 年に建築されたとする箱書きの史料の価値が高いことを裏付けることとなります。
- (5) 江戸時代以前の調査地では、製鉄や鍛冶が営まれていたようです。炭の年代測定では 15 世紀後半～16 世紀前半の値が最も古いものでした。

### 【引用資料】

月舘敏栄「指定文化財調査報告書」2006 年 岩手県教育委員会

高橋恒夫「指定文化財（候補）調査報告書」2006 年 岩手県教育委員会

（編）高橋恒夫・(株)ディーワーク『よみがえる陸前高田市の今泉集落 — 流失前の調査と復興活動資料集 —』

2015 年 気仙地区コミュニティ推進協議会 東北工業大学建築史研究室

月舘敏栄「津波で流失した県指定文化財吉田家住宅の復元活動 — CG 及び模型復元 —」『岩手県立博物館日曜講座資料』2013 年 岩手県立博物館

### 【註】

- 註 1) 出土陶磁器は大橋康二氏（元佐賀県立九州陶磁文化館館長）に鑑定、ご教示をいただきました。
- 註 2) 震災前の吉田家住宅航空写真の使用は所有者の佐々木孝氏のご厚意によります。
- 註 3) 岩手県指定文化財「吉田家住宅」にかかる写真・絵図の使用は現当主の吉田裕氏のご厚意によります。
- 註 4) 吉田家建物絵図（複写）の実見及び礎石墨書文字の解読には陸前高田古文書研究会（会長：細谷英男氏）のご尽力とご教示をいただきました。
- 註 5) 月舘敏栄氏（八戸工業大学）、高橋恒夫氏（東北工業大学）から建物に関するご教示をいただきました。
- 註 6) 吉田家住宅にかかる絵図からの主屋平面復元図は瀧本が作成しました。

発掘調査に当たっては、調査地の所有者である吉田裕氏をはじめ、

多くの市民の皆様のご協力を賜りました。

厚くお礼を申し上げます。（調査担当者）



見学？（2015 年 11 月 11 日）



图8 吉田家住宅全景（1990年頃）

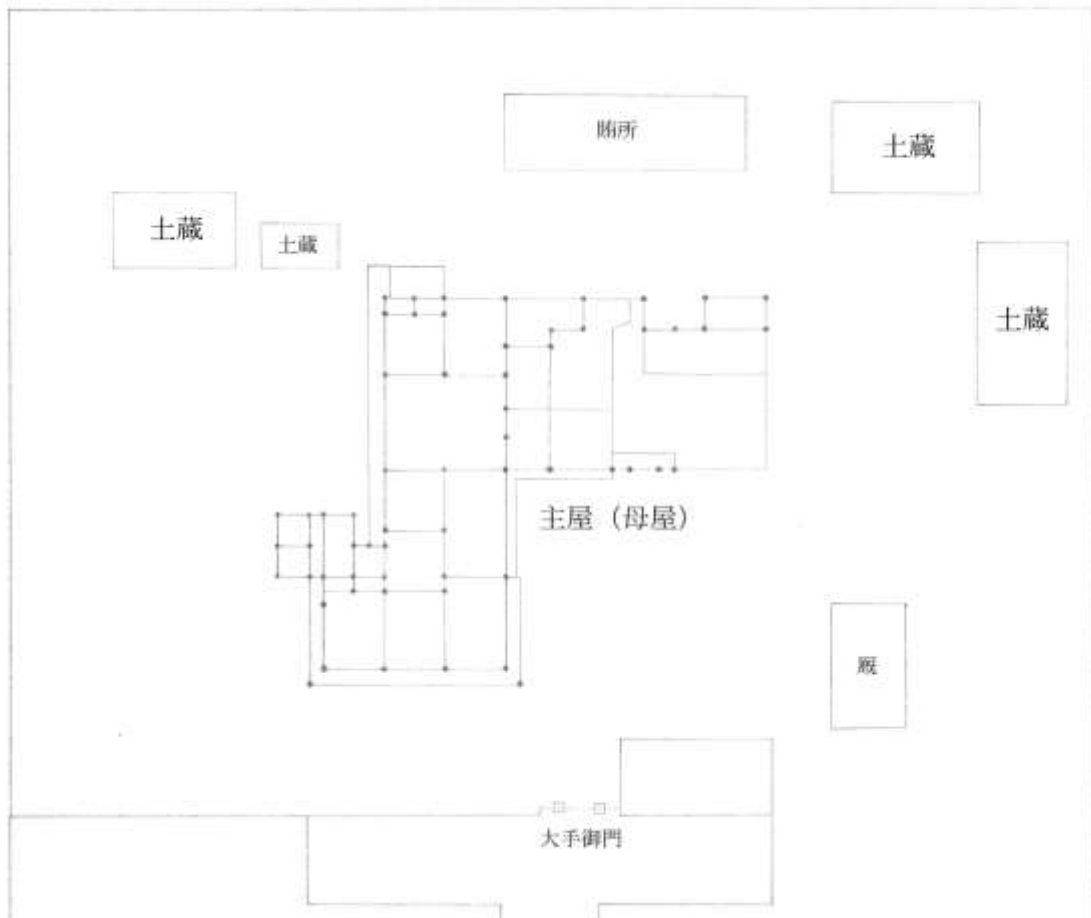


图9 屋敷建物配置復元図（1852年）



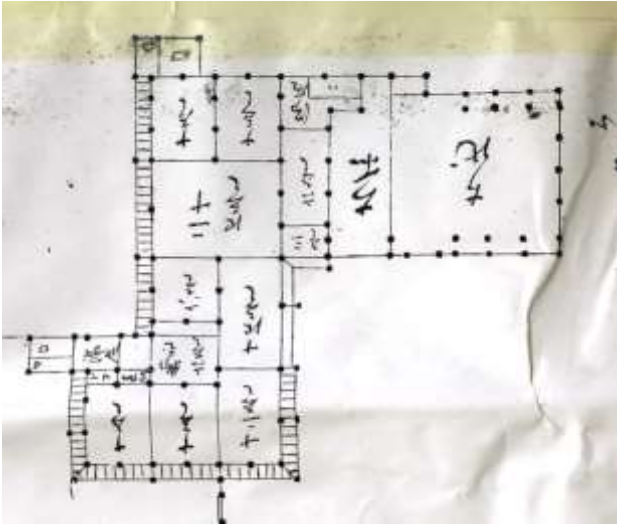


図10 主屋平面図「今泉町麩絵図（1804～1830年頃）より」

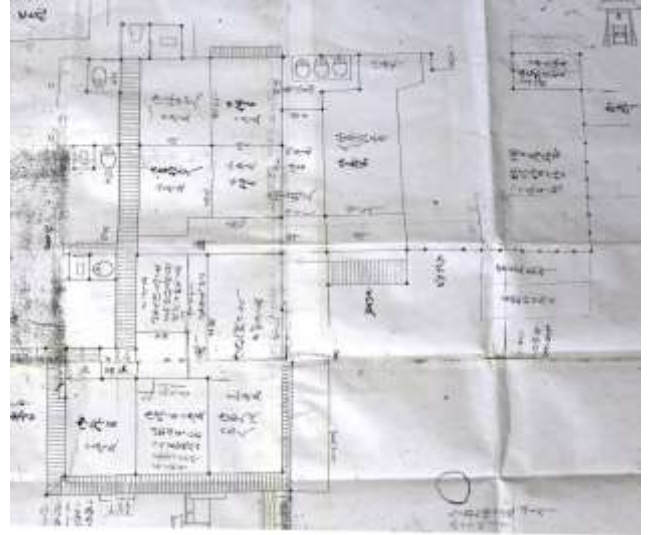


図11 主屋平面図「御巡見 黒田五右衛門様 御寓御宿  
（1838年7月24日）より」

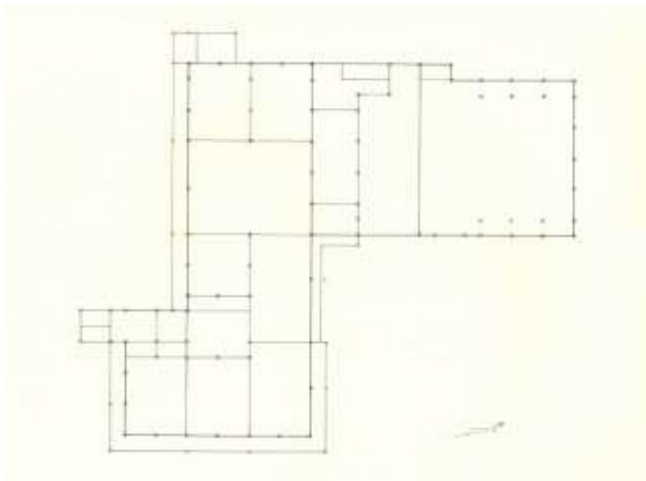


図12 主屋復元平面図（1804～1830年頃）

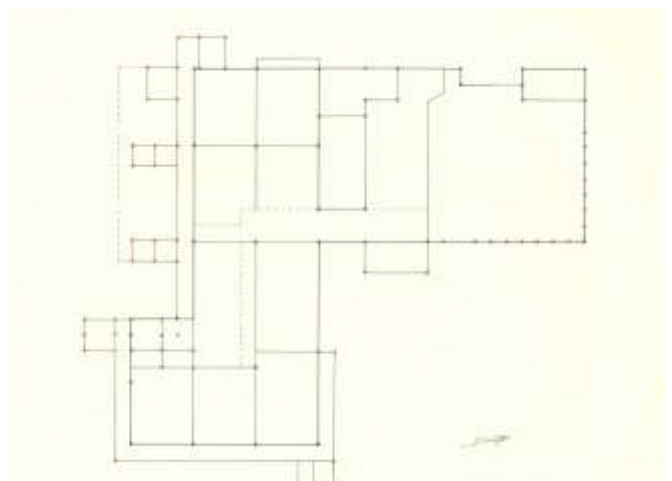


図13 主屋復元平面図（1838年）

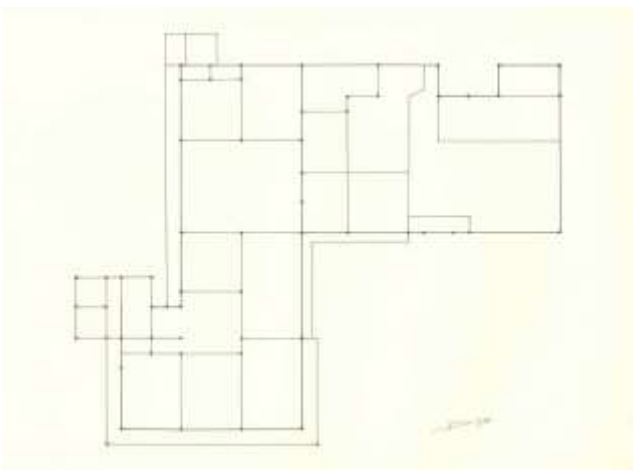


図14 主屋復元平面図（1852年）

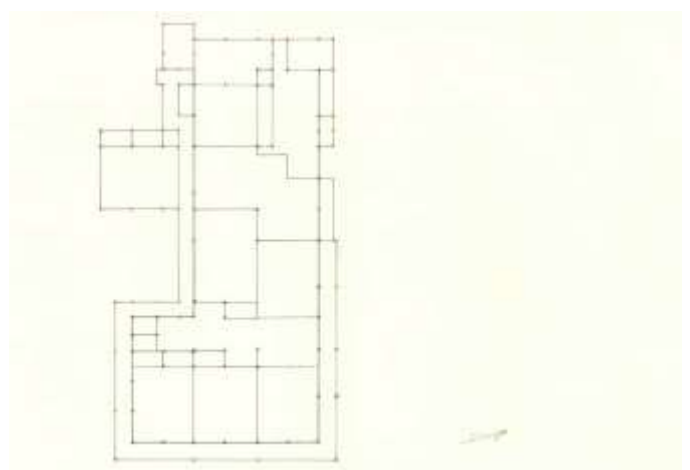


図15 主屋復元平面図（2006年）



図 16 津波堆積土除去後（2014年12月）



図 17 指定建物検出（2015年6月）



図 18 納屋・旧台所検出（2015年9月）



図 19 主屋建物礎石墨書（墨直線と「ほ」の字）



図 20 下層建物検出（2015年11月）

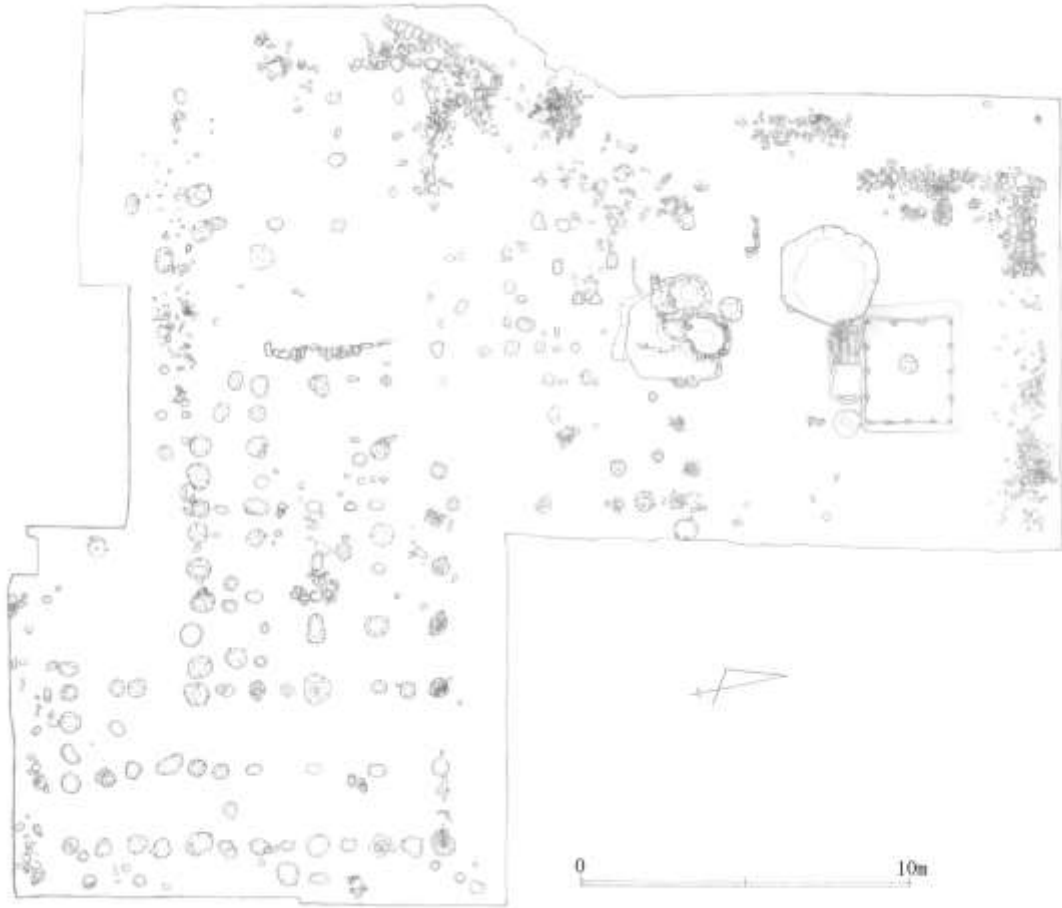


图 21 主屋・台所（旧主屋）下層遺構平面図



图 22 主屋下層基壇北西隅（北西から）



图 23 主屋下層建物基礎（西から）



图 24 鍛冶関係遺構（東から）



图 25 炉跡（南から）





图 26 元文一分金(元文元年 1736 年)



图 27 染付碗 (17 世紀前半) 中国・景德鎮



图 28 染付皿 (1630 年~1640 年) 有田



图 29 染付皿 (1660 年~1670 年) 有田



图 30 染付大皿 (1660 年~1670 年) 有田



图 31 染付皿 (17 世紀後半) 有田・(長吉谷窯の可能性)



图 32 染付皿 (18 世紀前半) 肥前



图 33 染付そば猪口 (18 世紀前半) 肥前



图 34 染付皿 (18 世紀後半) 武雄・筒江窯



图 35 染付碗 (18 世紀後半) 肥前



图 36 染付皿 (18 世紀中葉～末) 肥前



图 37 染付皿 (18 世紀末～19 世紀初) 肥前



图 38 染付香炉脚 (18 世紀後半～19 世紀前半) 有田



图 39 白磁戸車 (1780 年～) 肥前

## <教育委員会の文化財への取り組み②>

### 中沢浜貝塚歴史防災公園整備事業について（広田町）

陸前高田市教育委員会生涯学習課  
藤元 剛史（京都市より派遣）

#### 1 中沢浜貝塚の概要

国指定史跡「中沢浜貝塚」は、岩手県陸前高田市広田町字中沢地区に所在し、陸前高田市の中心部から直線にして東南へ約 8.5 kmの場所に位置しています。遺跡は、広田湾を眼下に望む広田半島先端部付近の大森山（標高 147.2m）の西側丘陵上に存在。市内 266 ヶ所の遺跡のうち、縄文時代早期から平安時代へと続く複合遺跡は中沢浜貝塚のみとなっています。



中沢浜貝塚から広田湾の海を臨む美しい眺望



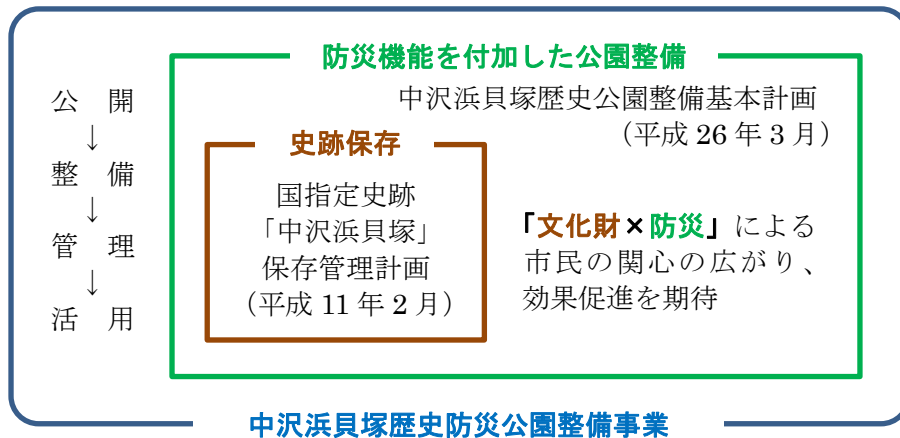
## 2 中沢浜貝塚歴史防災公園事業の概要

### (1) 事業目的

中沢浜貝塚については、史跡として適切に保存管理するための施策を定め、総合的かつ計画的な運用を推進することを目的に策定された「国指定史跡『中沢浜貝塚』保存管理計画書（平成 11 年 2 月）」に基づき、適切な管理と学術研究を進めるとともに、地域振興と一体化した史跡保存のあり方について市民を交えた検討を重ねてきました。

一方で、当地域では平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災により甚大な被害を受けた経験から、地域住民の緊急避難先を早急に整備する必要性が高まっています。

このような状況から市民の意見を取り入れた史跡保存を進めつつ、防災機能を付加した歴史防災公園として整備するものであります。



### (2) 事業期間

平成 25～28 年度

平成 25 年度	中沢浜貝塚歴史防災公園整備事業	基本構想・基本計画策定
26 年度	同	基本設計
27 年度	同	実施設計
28 年度	同	整備工事

※ 事業完了後、第二段階整備（史跡整備）についての検討を進めていく予定

### (3) 計画の基本理念

「豊かな海とともに住み続けてきた歴史を後世に伝える歴史防災公園」

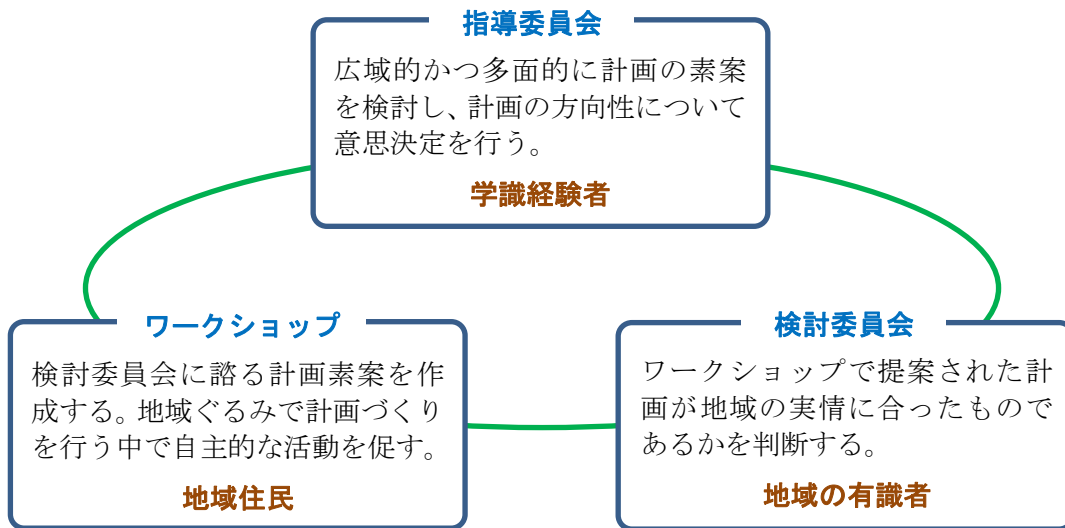
現況や整備課題、「国指定史跡『中沢浜貝塚』保存管理計画書」を踏まえるとともに、本市震災復興計画の「海と緑と太陽との共生・海浜新都市の創造」に基づき、海と豊かな自然に囲まれ、縄文人が長い間生活を営んできた中沢浜貝塚の公園計画地を「市民協働によるまちづくり」として整備することを目指し、計画の基本理念を次のとおり設定します。

- ・豊かな海とともに住み続けてきた歴史を学び、後世に伝える公園
- ・地域とともに史跡を見守り、地域全員で育てていく公園
- ・東日本大震災の記憶を継承し、史跡保全に配慮しつつ災害時の避難場所となる公園

### (4) 公園整備の内容

避難階段・防災あずまや・かまどベンチ・照明・誘導サインの設置、防災多目的広場（芝生広場）の整備、広報用パンフレットの作成（2,000 部）

(5) 事業推進体制（基本計画策定）



(6) これまでの取組経過

平成 25 年度

・公園整備基本構想・基本計画策定

- 8 月 31 日 第 1 回ワークショップ「地域のいいところを見つけよう！」（参加者 12 人）
- 10 月 19 日 第 2 回ワークショップ「公園をデザインしてみよう！」（参加者 13 人）
- 12 月 5 日 第 1 回検討委員会（委員長：細谷 英男 市文化財調査委員会委員長）
- 1 月 30 日 第 3 回ワークショップ「公園のこれからを考えよう！」（参加者 17 人）
  - ・貝塚の歴史に関する講演（特別講師：渡辺 誠 名古屋大学名誉教授）
- 1 月 31 日 第 1 回指導委員会（委員長：渡辺 誠 名古屋大学名誉教授）
- 2 月 21 日 第 2 回検討委員会
- 2 月 24 日 第 2 回指導委員会



平成 26 年度

・公園整備基本設計

- 1 月 22 日 意見交換会（参加者 5 人）
- ・路線測量、現地測量、基準点測量、水準測量、用地測量、広報用パンフレットの検討

平成 27 年度

・公園整備実施設計

- 8 月 1 日 現地説明会（参加者 40 人）
- 10 月 21 日 整備指導委員会（専門的な見地から多角的に実施設計案を検討）
- ・用地測量、地質調査、広報用パンフレットの作成

(7) 平成 27 年度の実施状況

6 月 内容確認調査 (6/29~7/31) ※調査の詳細は 31 頁以降参照



7 月 用地測量、地質調査 (7/8~16)



8 月 現地説明会 (8/1)



8 月 避難階段設置箇所の試掘調査 (8/17~9/4) ※史跡範囲外



9 月 実施設計案の作成、地権者立会いによる境界確認 (9/17)、文化庁協議 (9/24)  
10 月 整備指導委員会 (10/21)



(8) 実施設計案の概要



避難階段

傾斜角度や手すりなど、高齢者や子どもでも昇りやすい設計。蓄光材により夜間でも安全に通行が可能



かまどベンチ

災害時には座る部分はずして、かまどとして炊き出しができる設計



災害時



津波記念碑

石に刻まれた教え  
 低いところに住家を建てるな  
 地震があったら津浪の用心  
 津波と聞いたら欲捨て逃げる  
 それ津波機敏に高所へ 廣田村  
 (昭和9年3月3日建之)

昭和三陸地震津波(昭和8年3月3日)の後に建てられた石碑。広田町には津波の教訓を伝える津波記念碑が本公園内の石碑を含め8基存在



防災あずまや

普段は公園の休憩場所、災害時はテントを張って救護室や救援物資の一時保管場所等として利用が可能

(9) 今後の予定

平成 28 年度

- 4 月 設計図書に基づく積算調整
- 5 月 工事発注（入札）、業者決定
- 6 月 地元説明、工事着工
- 11 月 工事竣工、完成記念事業の実施

(10) 文化財等保存活用計画に基づく施策の方向性（案）

平成 26 年 9 月に策定された「陸前高田市文化財等保存活用計画」の基本方針「豊かな自然・歴史・文化の価値に『気づき、つたえ、活かす』」を踏まえた今後の中沢浜貝塚歴史防災公園事業に係る施策の方向性（案）は次のとおりです。

	方 策	施策の方向性（案）
気 づ き	<総合調査・研究> 豊かな自然・歴史・文化を掘り起こす	○史跡の適切な保存管理、継続的な研究・調査 ○土地の公有化
	<学習機会> 行政と民間が協力して歴史文化の学びの場をつくる	○学校教育における教科・領域等との連携 ○校外学習での活用
つ た え	<指定文化財の拡充> 調査に基づき、指定文化財を拡充する	○津波記念碑の新指定
	<文化財保護・伝承活動> 民間との協働により文化財等をまもり伝える	○公園管理体制の構築 ○語り部活動、広報用パンフレットの活用
活 か す	<生涯学習> 陸前高田の誇りを伝える社会教育を推進する	○既存講座等でのテーマ設定や講師派遣、会場提供 ○博物館事業との連携
	<地域づくり> 歴史文化を活用した新たな陸前高田ブランドの創出	○歴史文化、公園施設を活用した地域の魅力発信 ○地域の消防・避難訓練等との連携

# 中沢浜貝塚歴史防災公園関連試掘確認調査概要

陸前高田市教育委員会生涯学習課  
遠藤 勝博

## 1 中沢浜貝塚の特徴

太平洋に大きく突き出た広田半島は、南三陸の海に広田湾を形作り、リアス式海岸特有の複雑な海岸線を織りなし、風光明媚な景観を成しています。この広田半島には貝塚を中心とした貴重な遺跡が数多く存在しており、縄文時代の人々は、三陸沖の好漁場を背景に、多くの自然の恵みを受け、豊かな生活を営んでいたと推定されています。



岩手県最古の釣針



多種多様な骨角器

その中でもとりわけ国指定史跡「中沢浜貝塚」からは、これまでの発掘調査によって縄文時代早期から晩期まで続く貝層、数多くの釣針・銛等の骨角器や土器等の遺物などが発見されており、本市のみならず、日本における縄文時代の漁撈文化を知るうえで大変貴重な遺跡となっています。

さらに、明治40年から今日に至るまで30体以上の保存状態の良い人骨が発見されるなど、日本の人類学史上においても重要な遺跡となっており、昭和9年1月に国の史跡に指定されました。



中沢浜貝塚貝層



赤ちゃんを埋葬した土器棺墓



縄文時代中期頃の女性骨

## 2 過去の調査状況（抜粋）

年代	調査年	調査内容
明治	40・41	中野完一氏調査 人骨23体（屈葬、貝輪の装着、赤色人骨） 土器棺に入った小児骨
大正	6・13・14	土器棺に入った胎児骨
昭和	59（第1次） 60（第2次） 61（第3次） 62・63（第4次）	陸前高田市教育委員会調査 貝層（縄文早期～晩期、弥生時代） 人骨5体、埋葬犬3体、土器棺2個体、埋甕5個体
平成	4・5・9・10・11	陸前高田市教育委員会調査 貝層（縄文早期～中期） 土器棺、朱に染まった新生児骨、人骨



### 3 中沢浜貝塚歴史防災公園関連試掘確認調査 <史跡範囲内>

#### (1) 調査方法

人力により、2×1.5m のトレンチを 24 ヶ所に掘削

避難階段 4 ヶ所

多目的広場 7 ヶ所

園路関係 8 ヶ所（中央：4、南：3、その他：1）

四阿関係 5 ヶ所

#### (2) 調査結果

出土遺物：縄文土器片 3 箱、寛永通宝 1 点

検出遺構：なし

#### (3) 調査所見

トレンチの深さについては平均 1.5m 弱となります。これは遺跡全体が砂層で構成されており、崩落の危険性があるためです。

出土遺物の大半は南園路に関するトレンチ 11, 12, 17 からのものであり、他のトレンチについては、各エリアで数片の遺物出土に留まっています。

### 4 中沢浜貝塚歴史防災公園関連試掘確認調査 <史跡範囲外（避難階段部分）>

#### (1) 調査方法

基本的に表土及び碎石等のみを重機で除去。その後人力にて貝層直上までの検出とカクランの土のみを除去し、貝層の掘削は行っていません。

#### (2) 調査結果

出土遺物：縄文土器片 30 箱

検出遺構：なし

#### (3) 調査所見

今回は建築物基礎等により掘削されたカクランのみの調査としました。

多量の遺物についてはカクランからの出土です。

### 5 歴史防災公園整備に係る調査の基本的な考え方

(1) 調査結果を踏まえ、基礎部分についても保護層（約 30 cm）を確保し、整備を行います。

(2) 調査及び工事において、貝層並びに包含層の掘削は行いません。

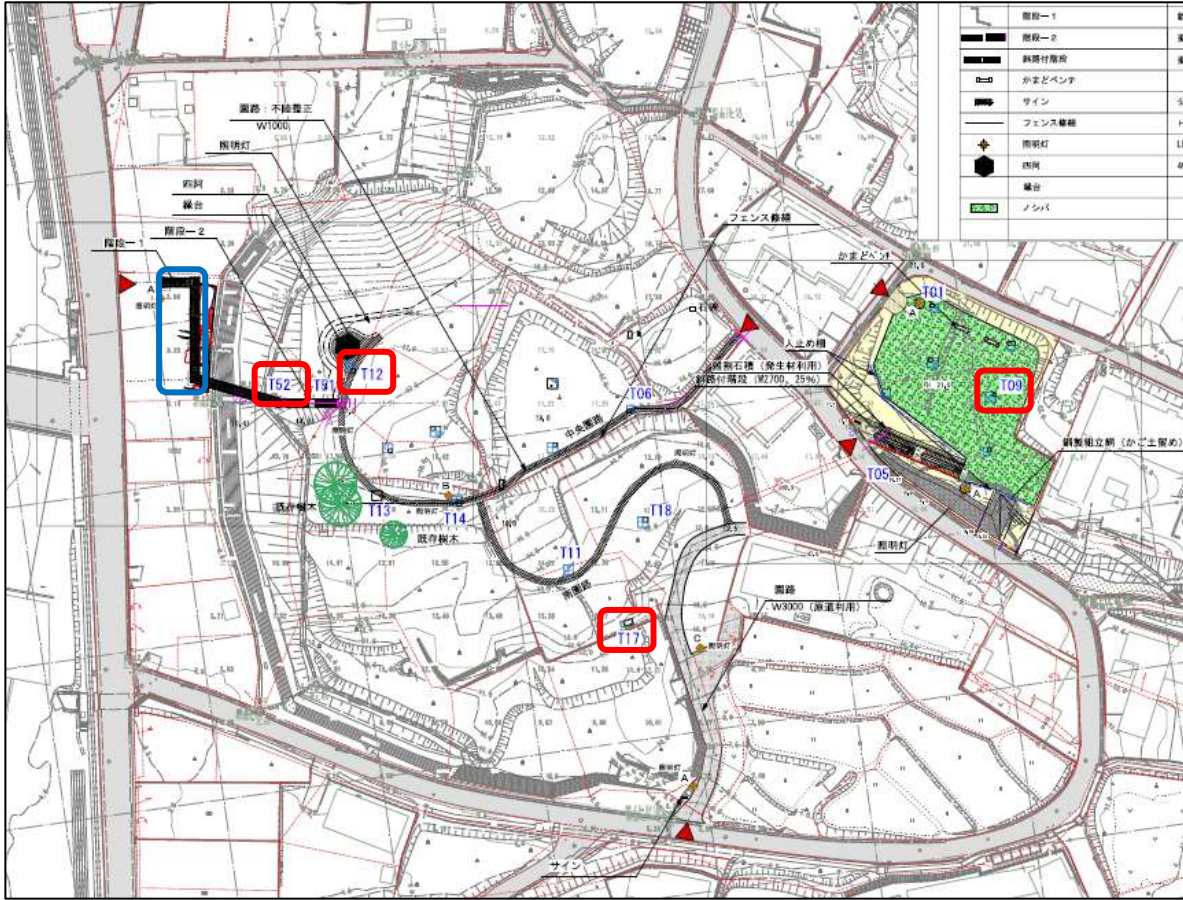
(3) 避難階段の設置については、貝層保護のため設計変更での対応とします。

※ 遺物換算の箱は、内寸で 550×390×144 mm、内容量 30.6 L のものを使用。

6 全体計画平面図（トレンチ箇所抜粋）

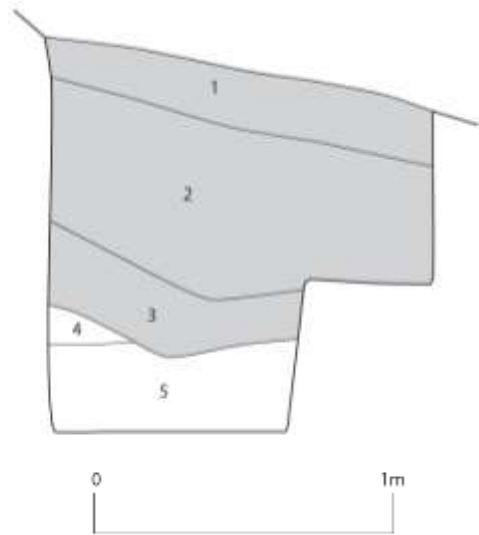
□：史跡範囲内

□：史跡範囲外



7 史跡範囲内のトレンチ土層断面

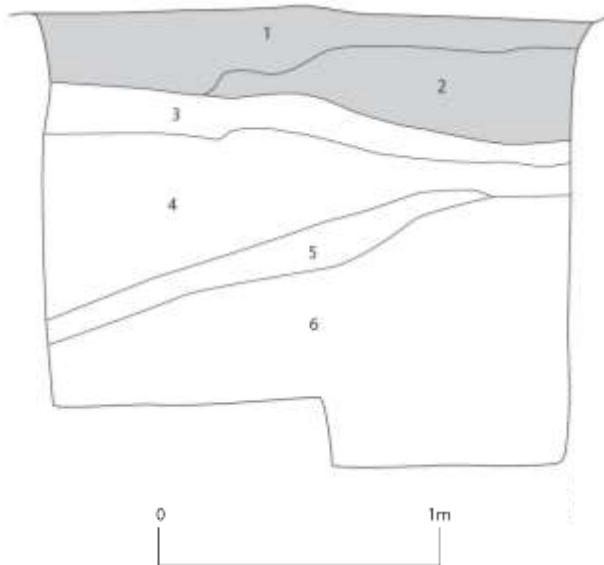
(1) 避難階段 (T52)



凡 例		カクラン及び盛土
		砂層
		遺物包含層

1. 褐色、細砂
2. 暗褐色、粗砂  
黒褐色、細砂  
互層
3. 灰褐色、細砂  
黒褐色、シルト質、以上攪乱層  
ゴミ穴
4. にぶい橙色、細砂
5. にぶい橙色、細砂

(2) 防災あづまや (T12)

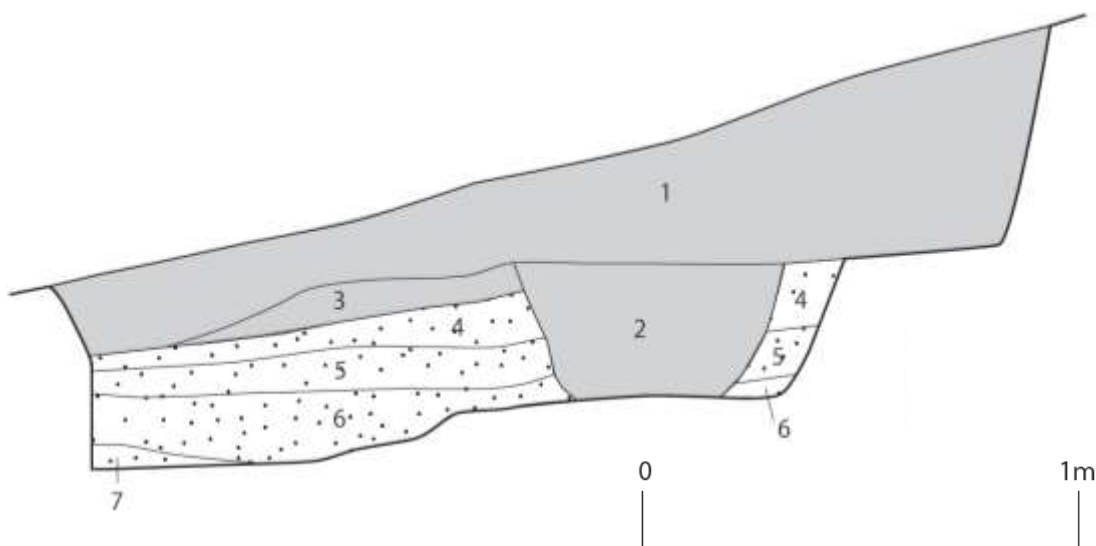


- 1. にぶい褐色、細砂
- 2. 褐色、細砂
- 3. 灰褐～黒褐色、細砂
- 4. にぶい橙～にぶい褐色、細砂
- 5. 褐色、細砂
- 6. にぶい橙色、細砂

(3) 南園路 (T17)

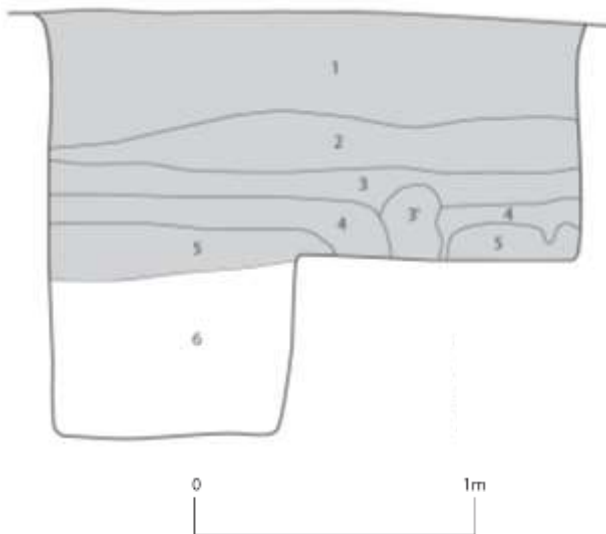


- 1. 灰褐色、砂質
- 2. 黒褐色、砂質
- 3. 灰褐色、細砂ブロック、以上攪乱層
- 4. 黒褐色、細砂、包含層
- 5. 極暗褐色、細砂
- 6. 暗褐～極暗褐色、細砂、包含層
- 7. にぶい褐色、細砂



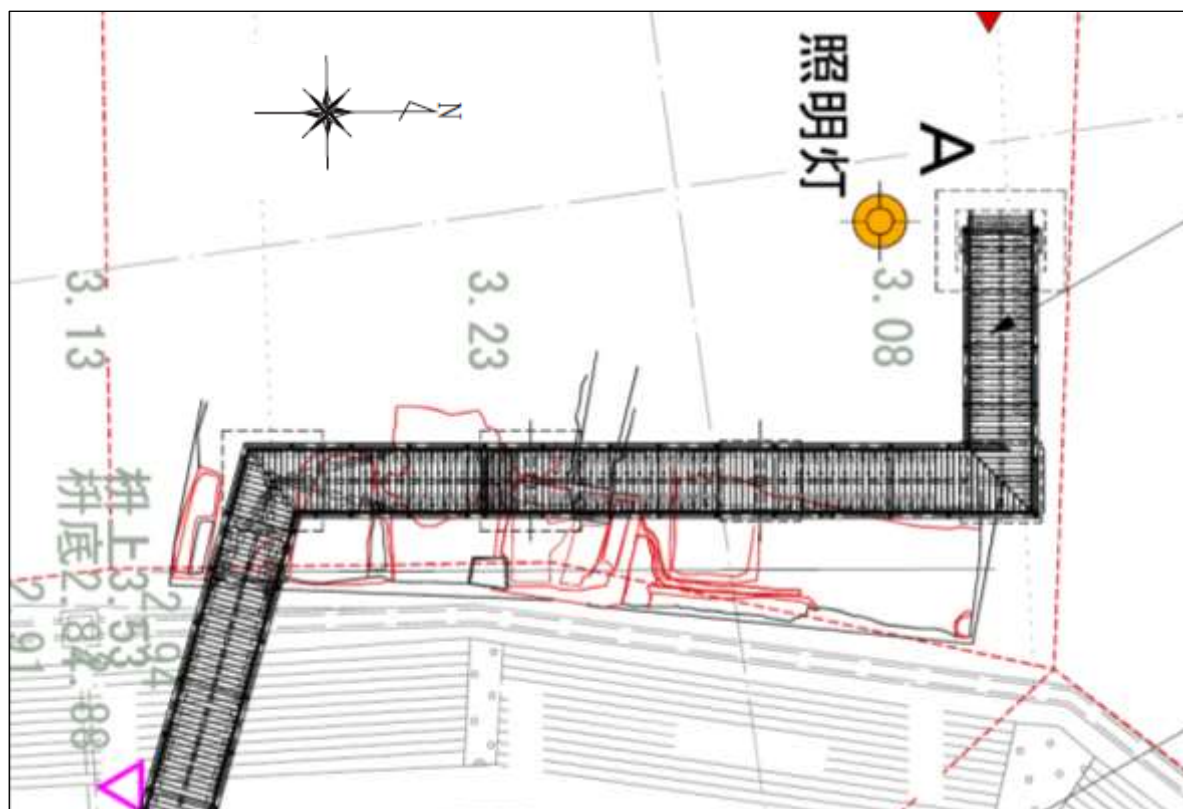


(4) 防災多目的広場 (T09)

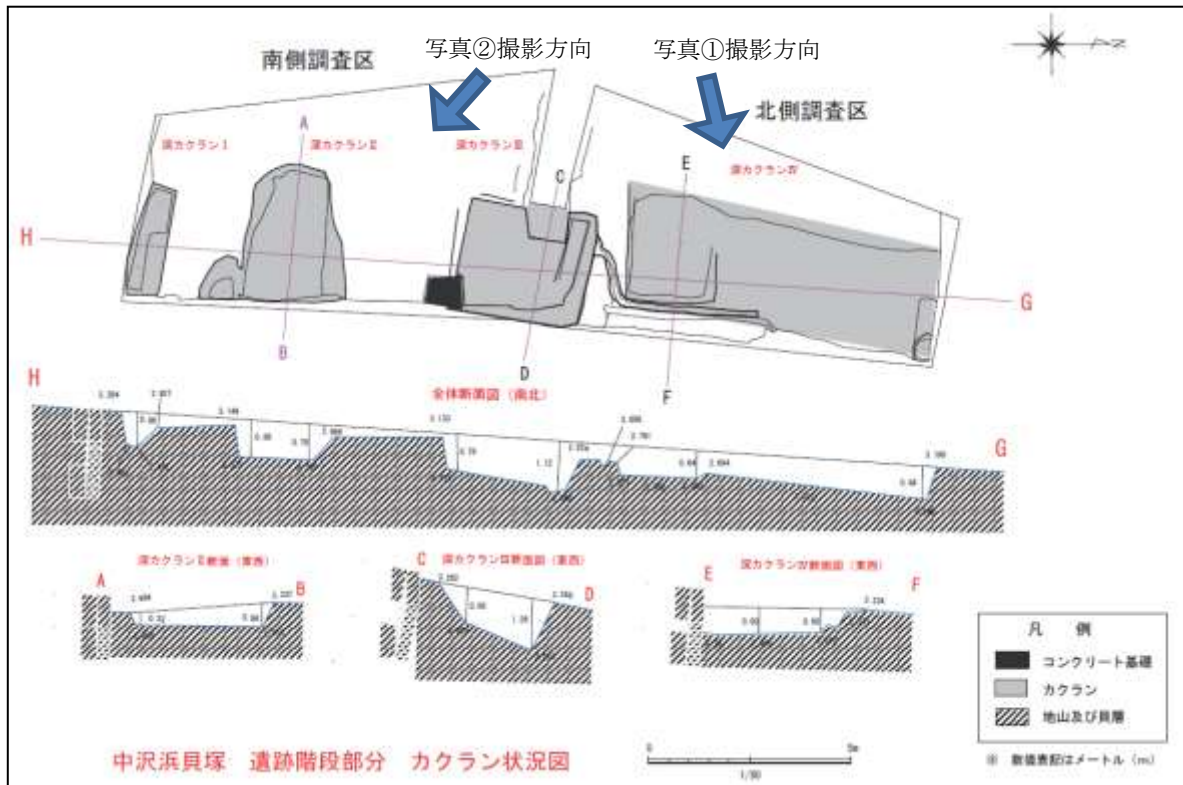


- 1. 灰褐色、細砂、盛土
- 2. にぶい褐色、細砂、盛土
- 3. 黒褐色・明褐色、砂質
- 4. 暗褐色、細砂
- 5. にぶい橙～にぶい褐色、細砂、以上攪乱層
- 6. にぶい褐色、極細砂

8 史跡範囲外（避難階段部分）の平面図



## 9 史跡範囲外（避難階段部分）のカクラン状況図



写真①：北側調査区



写真②：南側調査区

## 10 調査全体を通じての所見

- (1) 小半島状地形上に砂丘が形成されています。
- (2) 三方向（北、西、南）に貝塚が形成されています。
- (3) 西側の崖下にも貝塚が広がっています。

